

SSKS

ほっと

「ほっとスペース八王子」ニュース

2010年5月号

132号

定価 100円

編集人
電話
FAX
E-Mail
郵便振替
発行所

八王子市八幡町一三二二ふくしまやビル二階
「ほっとスペース八王子」(事務局・堀部正)
〇四二一六二八一三一九
〇四二一六二〇一七八六
<http://homepage2.nifty.com/hotspacex/>
CXB01672@nifty.ne.jp
〇〇一八〇一七二四六「ほっとスペース八王子」
世田谷区砧六一二六一二二 障害者団体定期刊行物協会

目次

共同代表の挨拶	2頁
	4頁
	5頁
6頁	
11頁	
	13頁
	15頁
編集後記	16頁

本年度、「代表」の一人として就任(しゅうにん)致しました塩原(しおばら)哲夫(てつお)です。以下の通り、就任のご挨拶をさせて頂きます。

【差別・偏見(へんけん)への闘い(たたかい)の幕開け(まくあけ)】

さあ! 始めよう!...! 「仕事」が始まる。これ迄、先輩(せんぱい)諸氏(しよし)が築きあげてきたほっとの歴史。試行(しこう)錯誤(さくご)の連続になるかもしれない。

メンバー同士の確執(かくしつ)もあるかもしれない。でも、私達の共通事項は精神病者である事。差別をされる側である事。不当な扱いには、「感情的な言葉」ではなく、冷静・沈着(ちんちゃく)・頭脳を使った「理路整然(りろせいぜん)とした言葉」で対応しよう。歴史あるほっとの代表としての重責(じゅうせき)を任された今、真摯(しんし)な思いで、

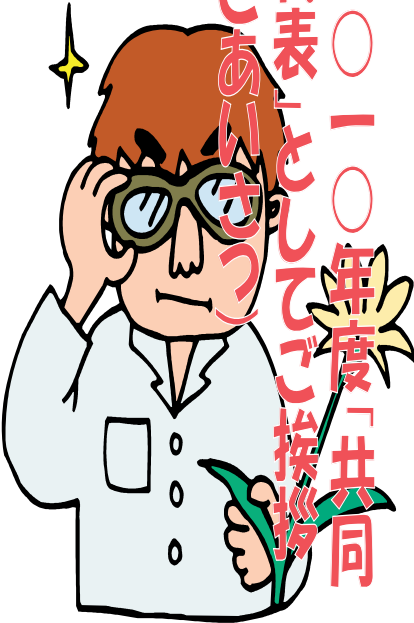
常に前向きに、問題意識を持って、全ての差別・偏見への闘いを開始しよう。差別・偏見は精神病者には限らない。知的障害者、身体障害者、同和(どうわ)問題、在日朝鮮人問題、性同一性障害、同性愛者、色々な差別・偏見がこの日本には厳然(げんぜん)として存在する。我々の作業所は全ての差別・偏見に悩む人々に門戸(もんこ)を開き、例え問題の解決が出来なくとも、共に考え・悩み、一緒に差別・偏見の無い日本を模索(もさく)しよう。

【メンバー諸氏(しよし)へ...】

ほっとの主役は、あくまでも「全てのメンバーだ!」。我々は脇役(わきやく)に過ぎないが、病気の症状でナカナカ意思の疎通(そつう)が出来ないメンバーがいる事は確かな事。広い心で病状、否(いな)「個性」を認め合おう。その為に、我々脇役は誠意を尽くそう(つくそう)と思う。「大きな声」で自分の考えを伝える事が出来るメンバーもいれば、固く殻(から)に

閉じこもってしまっているメンバーもいる。声なき声にも、「語りかけ作戦」で彼らの声を聞き出したいと思う。全メンバー参加型のほっとでありたいと思う次第(しだい)だ。

代表「せいで」ご挨拶



【我(われ)以外、皆(みな)師(し)なり】

一九九八年に長野県で開催(かいさい)された「長野冬季(とうき)オリンピック」の仕事に私は携わった(たずさわった)。M-ウエーブで、スピード・スケートで金メダルを取った清水選手の言葉が忘れられない。「我以外、皆

師なり」(自分以外は皆、先生だ)名言だと思う。私はこの言葉を常に胸にとどめて、事にあたりたいと思う。

【対・行政(ぎょうせい)に対して】

官庁(かんちよう)営業をしていた職歴(しよくれき)が私にはある。また、八王子市役所に勤めていた元教育長の叔父(おじ)もいる。対等な立場で対・行政に対しては、「話し合い路線」で臨みたい(のぞみたい)と思う。決して権利のみ主張するのではなく、相手の話をよく聞き、オカシイと思う点は大いに議論を重ねて、我々の置かれている立場を十分に理解して頂き、ほっとISMのご理解を賜りたい(たまわりたい)と思う。

天下の悪法である「自立支援法」。大臣は廃案(はいあん)と表明したが、一昨日、何気(なにげ)にネット上に書かれていた事が脳裏(のうり)をかすめる。そこには(ベスト・アンサーとして紹介(しょうかい)しようかい)されたいもの、廃案(はいあん)にはなったものの、我々にとって負担率がプラスになるかマイナスになるかは全く不明であると書かれていた。「自立支援法」は今後も予断(よだん)は許されない。何せ、政治家なんて二枚舌(にまいじた)の持ち主が多いから。

【ホウ・レン・ソウ報告・連絡・相談の徹底(てつてい)】

企業の合言葉であるホウ・レン・ソウ(報告・



総会直後の日帰り旅行では山梨市のフルーツ公園に。バックに富士山が写っています

連絡・相談)の徹底。メンバーもそうであるが、特に職員、代表間での周知(しゅうち)徹底(てつてい)を図りたい。一人で思い悩み辞めていった職員も過去にいた事も確かな事。一人で仕事を抱え込まずに、皆で協力しあい仕事をしたいと思う。思い悩むな、一人で……!君の問題は、皆の問題だ。

【ほっと-SM後継者(こうけいしゃ)の育成】病者による「自主運営」。人間誰でも、歳をとる老人になる。「老害(ろうがい)」なる言葉もあるくらいだ。これからのほっとの将来を担う(になう)のは、今参加している若いメンバーだ。「活弁(かつべん)になってくれ!自分自身のポリシーを持つてくれ……!」

【対・堀部正氏】

堀部氏とは長い付き合いだ。長所も短所も充分(じゅうぶん)に知っている。長所はご自分のご主張を曲げない事。堀部氏がいなければ、今のほっとは無かったと言っても過言(かごん)ではない。ただ

し、短所も多い。堀部氏の為に辞めたメンバー!

職員も過去に多々(ただ)いた事も確か。何回も堀部氏にはご忠告(ごちゅうご)申し上げている事なのだが、ご自分の出来る事は誰でも出来るかと勘違い(かんちがい)しているフシが彼にはある。また、思想的に左翼(さよく)傾向が多々見受けられる。あちらは、天下の国立大学卒業で、私は右翼(うよく)傾向の強い大学である拓殖大学卒業。思想的にも相いれない場面もありうる。「精神障害者」手帳についても、古くから「お遊び落書き帳」で議論してきたが、結論はイマダ二出ていない。韓国研修旅行も意見が真っ二つに分かれている状態。堀部氏との激論(げきろん)もこれから予想がされる。

【対・自分自身】

私は、社会経験は豊富(ほうふ)ながらも、マダマダ未熟者(みじゆくもの)。人間100%の完璧(かんぺき)な人などいない。コンピューター、一つを例にしても私の場合はコンピューターではなく、カン(感)かん)コンピューターで、テキストで学ぶでもなく、スクールに通った事も無い。コンピューターを購入(こうにゆう)したお店の店員に聞きながら覚えた超アナログ人間だ。先日、ヨカイチ(佐野)さんから100分程度ワードのイロハを教わり、私のワードの世界が飛躍的(ひやくてき)に向上した。ヨカイチさんに、とても感謝(かんしゃ)している。マサニ、「我以外、皆師(し)なり」を実践(じっせん)させて頂いた。

【学ぶ事】

メンバーの皆様からも、学ぶ事は多いと思う。また、特に精神病者を取りまく法の裏の裏まで熟知(じゆくち)している堀部氏からは「学ぶ」というより「盗む(ぬすむ)」というかたちでノウハウを吸収したい。

【楽しい雰囲気(ふんいき)のほっと作り】

楽しい雰囲気(ふんいき)のほっと作りがしたいと思う。プログラムの見直しが必要かと思う。過去の楽しかったプログラムを思い起こしつつ、会員各位からも新規プログラムのご提案(ごていあん)を頂ければ幸いだ。怒鳴り合ったり(どなりあつたり)、けなし合ったりは、決してしない事。職員は勿論(もちろん)の事、会員各位もレディーまたジェントル・マンである誇り(ほこり)を持って頂きたい(いだきたい)。

最後に、全てのメンバーに言いたい。「過去は過ぎ去り、新生(しんせい)のほっとへの険しい(けわしい)道のりへのご協力をお願い申し上げます。」

追伸(ついしん)・・・「言つはがたし、行うは何とか」という言葉があるが、「出来る理由を探しながら」事にあたりたいと思う。

二〇一〇年4月19日 塩原 哲夫

【特集】

橋本容子 さんの 人権訴訟



このたび二〇一〇年度の共同代表の一人として就任しました。共同代表は会員をまとめて引っ張っていくのが主な役割だと思います。だから共同代表はリーダーであり、ある意味偉いのだと思います。そして僕はリーダーの心

構えとして以下にイエス・キリストの言葉を引用して公約とします。皆さんのご批判と力添えをお願いいたします。

「マル」0・2545

「それでイエスは、皆を呼び集められ、こう言われました。「あなた方もしっているとお

り、この世の王や高官は、支配者として権力をほしいままにしています。しかし、あなたがたの間では違います。偉くなりたければ、皆に仕える者となりなさい。人を支配したければ、奴隷のように仕える者となりなさい。メシヤの私でさえ、人に仕えられるためではなく、仕えるためにきたのであり、多くの人の罪の代償として、自分のいのちを与えるためにきたのです。」

「トとしてこの尊厳を取り戻す闘い」

支援する会 代表

森島 吉美(広島修道大学教授)

裁判

平成20年8月初旬、鳥取地方裁判所に、精神障がい者の女性(橋本さん)が訴えを起こした。橋本さんは、精神医療の現場で行われた人権侵害事件の被害者だ。

訴えの要点は以下の通りである。(訴状より抜粋)

1 被告特定・特別医療法人明和会医療福祉センターに対しては、

①後述するように平成19年1月30日から同月31日にかけて起きた原告の薬物多量服用に伴う救急車の利用に際し、その搬送を受け入れた渡辺病院が治療を放棄したために、原告を同病院内で縊首行為をするに至るまで精神的に追い詰め

たことに対する責任を問う。

② 被告独立行政法人国立病院機構鳥取医療センターへ救急車を呼んで原告を転送するに際して、不適切な連絡(紹介)により、医療センターでの違法な身体拘束・隔離等の人権侵害惹起の責任を問う。

2 被告独立行政法人国立病院機構・同松島医師に対しては、同月〇一日に紹介を受け同機構の鳥取医療センターにおいて原告を受け入れた際、医療保護入院に必要な保護者の同意について、十分な説明を行わず、保護者からその場で同意書への署名も口頭での同意も取っていないにも関わらず、原告を違法に隔離・身体拘束し、男性看護師によって下着を剥ぎ取るという人権侵害を行ったことに対する責任を問うもの

である。

橋本さんの背景と事件に至る経緯

橋本さんは、鳥取県鳥取市在住。「双極性気分障害Ⅱ型」、精神障がい者の女性である。

橋本さんが、本件の被告である社会医療法人明和会医療福祉センターの開設する渡辺病院に通院を開始したのは、平成8年4月のことであつた。翌平成9年12月より、明和会の代表者である渡辺医師の担当するところとなり、事件の起こつた平成19年1月31日に至る約9年間、ほぼ一貫して同医師の治療を受けてきた。この間、渡辺医師は、彼女に様々な薬物療法を試みたが、それらはほとんど効果をあげず、彼女の病状は年々悪化の一途をたどつた。闘病が長期化すればするほど、彼女の焦りは増して行き、希望が見えない状況の中で、ひとり苦しみもがいていた。特に、事件の3年前あたりから、社会生活はおろか、日常生活さえも壊滅的な状況となり、その状況下での彼女の心理的な切迫感は筆舌に尽くしがたいものであつた。

人権侵害事件

そんな苦しみの中から、彼女は、オーバードーズ(薬物多量服用)をしてしまった。平成19年1月30日の昼頃のことだつた。

翌1月31日、朝。彼女が救急車で搬送されたのは、明和会渡辺病院だつた。同市内に住む彼

女の父親に連絡が取られ、父親は病院に駆けつけた。そこで渡辺医師が父親に告げたのは、「今日は診療しません。引き取ってください」ただそれだけだつた。彼女は薬物の影響下にあり、まるで酒に泥酔したような状態。実際、橋本さんには、30日の昼頃薬を飲んでからこの日31日の夕方までの記憶が無い。薬物多量服用による『ブリックアウト』である。しかし、結局、橋本さんは夕方まで外来処置室のベッドを与えられたものの、治療されることなく放置されていた。

被告明和会は、当初、橋本さんの薬物服用の事実を知らなかつたと虚偽の陳述をしたが、原告側が「調査囑託申立」によって、橋本さんを救急車搬送した、県東部広域行政管理組合・消防局長あてに、当日の救急搬送について調査を求めたところ、次の陳述では、橋本さんが薬を服用していたことは救急隊から聴取したが服用量は多量ではないので処置を必要としなかつた、と、途端に主張を翻している。

夕方、再び彼女のもとを訪れた渡辺医師は、付き添っていた父親に「引き取って下さい」と重ねて言い、父親が「しかしこんな状態では……と言っても「お帰り下さい」の一点張りです。さつさと姿を消してしまつたため、父親は、為す術もなく、ただただ困惑するばかりだつた。やがて外来も終了時間となつたが、橋本さんと父親は、すっかり照明も消えて人気のなくなつた外来で、看護師一人が居残っていたものの、ただ途方に暮れ、その場に居続けた。

長年の治療にも関わらず、悪化する一方の病状に対する苦しみの挙げ句に引き起こされた薬物多量服用であるのに、それに対して渡辺医師は、手を打つどころか治療拒否という、治療困難な患者を手にも負えない厄介者として放り出す、医療者としてあまりに無責任な態度に出たのだ。そのことに対して、橋本さんは、その場に居座ることで精一杯の抗議の気持ちを表したのだ。

しかし、橋本さんの思いは渡辺医師に届くことはなく、10年にもわたる辛い闘病の行き着いた先は、それだつた。彼女は、深い憤りとともに暗澹たる絶望に落ちていった。

そのやり場のない気持ちの発露として、発作的に彼女がとつた行動は、ふと目にした処置室の片隅に置かれた数枚のタオルを、カーテンレールに結びつけ、首をくぐるという行為だつた。これは、直後に看護師が気付き止めたため、大事に至らなかつた。

死に至るかもしれないほどの行動に走つてしまつたまで、渡辺医師の治療拒否は、彼女を追い詰めたのであり、このような患者の行動に対して、医師には予見可能性があつたと、本件訴状において、具体的な証拠を挙げ指摘がなされている。

その後、明和会渡辺病院は救急車を呼び、国立病院機構鳥取医療センターに橋本さんを転送した。総首行為に至るほど苦しんでいる患者を、ケアするどころか慌てて放り出したのだ。まるで「ゴミでも捨てるように」、不要なものを都合

の悪いものとして、彼女を遺棄したのである。

医療センターに到着した橋本さんと父親は、診察室に通された。しかし、当直の松島医師は彼女に目もくれず、内線電話で慌ただしく指示を出しており、聞くとはなく聞こえてきたその内容から、彼女を収容するための隔離室の準備が、既にとられていることが分かった。この時、松島医師は、診察と言えらる行為は一切行わず、事務的に書類を記入してその複写を彼女に渡した。これらの様子と松島医師の態度から、彼女は、自分が『医療保護入院』させられると瞬時に察知し、恐怖した。それはまさに10年余に渡る闘病の結果、彼女が精神医療の現場で患者として様々の不当な処遇を見聞き且つ経験してきたことにより培われた、知識と直感力によるものだった。

診察も何もいまま、いきなり医療保護入院させようとする医師のやり方に、強い憤りを覚えた彼女は、手渡された書類を、松島医師の目の前でわざと破り捨てた。すると松島医師は、「そんなことをすると懲役3ヶ月だ!」と強い口調で怒り出し、更に、「わしは精神保健指定医だ!」と、恫喝するような調子で言い放った。これらの言葉を聞いた時、橋本さんは、それまでの憤りが鎮まってしまうほどに呆れかえってしまった。松島医師の人権意識の低さ、患者を前にして子供だましの脅迫や権威のふりかざしを行う人間的な幼稚さに。しかし、それは同時に、この医師の前ではモラルも法も理論も封殺され、患者は絶対的な暴力で抑圧され、抵抗

することは全くの無駄であると、悟ることもあった。

実際、父親への説明も同意もいまま、松島医師の指示の下、あっという間に数名の職員によって彼女は羽交い締めになされ、無理矢理引きずるように病棟に拉致された。さすがに複数の人間に取り囲まれて問答無用に引きずられて行くことには、強い恐怖を感じ、彼女は悲鳴をあげて父親に助けを求めたが、松島医師も職員も黙って淡々とそれを行った。

橋本さんは、強制的に隔離室に入れられ、注射を打たれ、錠剤を飲まされ、ベッドに寝かされ、腹部と両手足を拘束具で拘束される。本人の了解どころか、父親の同意もいまま、彼女は強制的に監禁され身体拘束された。

しばらくして、男女2名の看護師がやって来て、男性看護師によって下半身丸裸になされ、紙おむつを着けられる。女性看護師はただ突っ立って見ているだけだった。橋本さんが「何故男性の看護師がいるのですか」と冷静に質問すると、女性看護師が応えて「看護師には男性も女性もいますよ!」と吐き捨てるやうに言った。人としての尊厳を取り戻す闘い

橋本さんが体験させられた今回の精神医療現場での驚くべき非人道的扱いは、断じて許されるべきではない。全く同意を求められることなく強制的に自由を奪われ非人間的扱いを受けたという事実は、人権無視、人権侵害というありきだりの表現を通り越して、「ひと」の存在に対する冒瀆である。

橋本さんは、この訴えを起こしたときの決意を次のように述べている。

「その時、私は『ひと』ではなく『もの』に過ぎなかった。医療者たちは当たり前のように私をそう扱った。これは、精神医療の現場で「患者保護」の美名のもとに公然と行われている日常的な人権侵害のひとつである。『ひと』はその尊厳を失っては存在の意味を失う。だから、私は、泣き寝入りはしない。私は、闘う決意をした。奪われた人としての『尊厳』を取り戻し、『ひと』として生きる意味を取り戻すために。同時に、そうすることが、社会の人々から顧みられることもいまま、精神医療の現場であまりにないがしろにされている多くの精神患者の人権を守ることにつながり、医療者たちの人権意識を変革するきっかけとなると信じるからだ。」

本訴訟の意義

(訴訟代理人) 大田原俊輔

本訴訟の意義は、このような形で精神障がいのある人が裁判を起こすことがなかなかできない中で、数少ない訴訟というところにあります。

精神障がい者の多くが、本来は地域で生活できるにも関わらず、社会的な理由で精神病院に隔離され、様々な理由で差別され、また、病院の中でも人間としての尊厳を保障されていると

は思えない状況にあります。そこでは、医療機関側の勝手な理由に基づく、身体拘束や濫用的な薬物投与という人権侵害が過去に多数生じています。

しかしながら、精神障がいのある人は、医師と患者という圧倒的な力関係のもとで、医療機関へも行政へも異議申し立てできず、まして、訴訟などできないのが実態です。

この度の橋本さんのような訴訟では、まず、

橋本さんの告発は魂への呼びかけ

(新入会員) 中島 千枝子

私達「障害者」にとつて、橋本さんの告発は医療関係者を被告席に座らせると同時に、「障害者」を差別してきた社会全体への厳しい問いかけであり、そして一人一人の魂への呼びかけであると思います。

橋本さんが、怒り悲しみ、絶望のギリギリの所から、これに屈してあきらめ、尊厳をふみにじられては生きていけない。そこから立ちあがったことに、心を揺さぶられない人がいるでしょうか？

私も一時期、不眠と食欲不振の中で、起床が出来なかつたり、味覚が無かつたり、記憶が途切れたり、薬の影響から、仕事場で大事な書きこみをしたものを捨ててしまつたり、意味不明の言葉を発したと家族や同僚から聞かされ、もう子どもを母に託して入院しか方法がないのか

支援できるだけの力量を持った弁護士がおらず、裁判所は無理解です。また、差別禁止法がないことから、人権問題としての視点が判断基準に取り込まれていません。つまり、本件のような訴訟では勝てない、というのが、法曹界の一般的な見方です。

だからこそ、この裁判で、また、一つ一つの裁判で、勝てるという事例を作ることが必要なのです。

と、絶望的になったことがありました。

橋本さんの過ごしてこられた日々は、どれほどの苦痛と喪失感に満ちていたことか、想像を超えるものであつたでしょう。でも医療に携わるものたちは何一つ彼女の苦しみに思いをはせることも無く、彼女への治療を放棄したばかりか、まるで、感情も意思も心もない物体の様に「あつかった」。

そのことは何を意味するでしょうか。「精神障害者」に人としての尊厳はない、どのように扱われようと文句は言うな。そう言っているのと同じではないでしょうか。どんな病気になつた人でも、これほど非人間的な扱いを、はたして受けるでしょうか。

「ほっとスペース八王子」に集まる人達は、医者が無理解、家族の冷たい態度、学校や職場

での孤立感、どこの作業所へ行っても社会に馴染しなければならぬのは「障害者」である自分の方の責任にされる、そのような差別を経験し、怒りを胸にイッパイ抱えて生きてきたと思います。その差別への怒りが、橋本さんの闘いに触れて、これが自分たちの求めた闘いだったんだと、すばやく直感したのです。

橋本さんの、差別と闘うと言つことは決して報復ということではなく、差別との闘いの真の勝利とは、すべての人々がその尊厳を獲得し、普遍的な人権の確立を実現すること、この言葉に共鳴して、「ほっとスペース八王子」では、これまでやったことのない人も文章を書き、街頭にたち、討論を重ねるなど、行動に立ち上がりました。

自主的に、協力して動くことの楽しさを学びました。あたかもそれは、橋本さんが、裁判を通して、人との繋がりが広がってきたことを語っていらつしゃつたような変化が、ひたひたと「ほっとスペース八王子」を包んでいます。

この闘いを通して「ほっとスペース八王子」の仲間、赤堀裁判の精神で創立した「ほっとスペース八王子」を再出発する、具体的一歩を踏み出しました。人間としての尊厳をともに獲得するために。

皆で進んで行きましよう、皆さん応援してください！

・60代の女性

許されないのは、人間として当然の事です。

・80代の男性

この行為は許されない。

・70代の男性

規制が緩いから、ようはこの様な事になる。法律整備をするべきです。

・70代の女性

人権無視。

・20代の男性

人権侵害。

・80代のご夫婦

許されない行為でもあり、許すべき行為でもある。患者の立場からみれば、許されない。看護師の立場からみれば、許すべき。

*大迫(おおさこ)さん、よくやってくれました。私の気のつかない事もあり、とても勉強になりました。流石、社会経験が豊富な方のご意見は芯をつくものがありますね。

・50代の男性

分からない人に対しては、人間として許されない。

・40代の女性

患者に対する理解感がない。

・80代の女性

徹底的に正常な看護師ならば、処罰すべし。

野放しには、出来ない。

しかるべき指導をすべき。

・40代の女性

精神病者であっても、一人の人間として扱うべきだ。人には「人格」があるから、「人間」として許されない。

・60代の男性

体の不自由な人間として、あるまじき行為。

・70代の女性

許してはいけない。何も分からない状態ですべき行為ではない。

・年齢不詳・性別不詳

いけない事。世間的にも許されない。野放しに出来ない。

・70代の男性

正常者が意識を持っていない者に対して、行う行いではない。

・30代の女性カップル

自由が利かない人に、そういう事をするのはいけない。

介護をするにも、本人が納得させなければいけない。

無理やり脱がすのはマズい。

オムツの交換請求があれば、オムツの装着もあると思うが、女性としては許せない。

・30代の男性

裁判全体を聴いてみないと私が意見すべき問題ではない。(しかしながらこの方の見解も「許されない行為」に〇がついていた。)

・10代の男性

資料不足。

そういう行為をされたら、怖い。

・70代の男性

女性に対して、とんでもない話だ。

失礼だ。

女性の尊厳を無視している。

・70代の男性

一般的に言って、常識から外れている。

看護師が下着を取ったという事が非常識。

こういう事は、おかしい。

・50代の男性

分からない人に対しての虐待は人間として許されない。

・40代の女性

病院側の患者に対する理解が無い。

上記、アンケートに対しては、私は当初、下記の言葉を考えた。「ご通行の皆様、橋本容子さんは、精神障害者ですが、平成19年1月31日に国立病院機構鳥取医療センターにて、男性看護師によって、下着つまりパンティーを剥ぎ取られ、下半身丸裸にされて、オムツをあてがわれました。こういった医療現場における性的な虐待について皆様のご意見をお聞かせ下さい。」

しかしながら、上記の表現では露骨過ぎる。また、端午祭りで子供連れが多く、性的な言葉を慎み、パンティーという言葉で指し示す様、大迫さんから提案があった。また、初めて会ったアンケート対象者に対しては「精神病者の医療虐待の事なんですけど・・・」と話す様に提案があった。この言い回しだと相手もすんなりと話題に入り込める。いきなり性的な事柄では、相手も戸惑う。今回は実質上、アンケート調査をした会員は3名で、三橋さん(大活躍)、大迫さん(とても良い提案)、塩原があたった。

当日は25℃を越える真夏日であったが、皆良く頑張った。3時間程度の調査であったが、とても充実感があり、皆笑顔、満足感、達成感があった。恒例の「端午祭り」自体には参加が出来なかったが、とても良い「プログラム」だったと会員一同が帰ってから話し合った。チラシを作成したが、渡すタイミング・相手等の問題で沢山は配れられなかった。

2010年5月5日(水)

共同代表・塩原 哲夫

橋本裁判闘争のアンケート

・30代の女性

弱い立場の人にこの様な事をして怒りを感じます。そして頼りにしている看護師さんだけに、ご家族もショックだったでしょう。この様な裏切りをして、看護師には十分反省してもらいたく看護師資格についても国で良く考えてもらいたいです。また、知人が若い男性看護師ですが、一生懸命です。一緒にされたくないです。

・60代の女性

絶対許されない事なので、もっと厳しくして欲しいです。

・70代の男性

何を考えて医療に従事しているのかわかりません。医療の資格を取るべき人間ではないです。

・50代の女性

人間として許されるべきではないと同じ女性として考えられませんか。

・30代の男性

医療に携わる仕事をしている人間として、していけない事を社会全体で考えるべきである。

・65歳の女性

その虐待は許されない事だと思います。弱い人間にそういう行為は絶対にしては欲しくないし、医療関係の人間の立場を考えて仕事して欲しいです。

・40代の女性

許されない行為だと思う。厳しく処置するべきではないでしょうか？こういった事実は、他にも公表されていないだけではないのでしょうか？女性のお世話、特に下（しも）の世話を男性にさせるのは、凄く大きな問題だと思います。

・60代の女性

人として許されざるべき行為を真剣に国で考えて欲しいと思います。また、病院の施設も男性・女性と別れて建てて欲しいです。

・40代の女性

この様な事件があった事は、病院側でも責任があるのではないのでしょうか？常に女性は女性、男性は男性と診察を受けたりするべきではないのでしょうか？私にはあーこのご意見は、ご本人が手書きされたものです。

・30代の女性

決して許されない行為だと思います。弱い人間にそういう行為をするのは、心外です。人間として社会の立場にたって自分を見直し考えて欲しいです。

・60歳の女性

看護師という立場にいる人間がその様な事をしては、いけない。こんな事が許されるなら、医療を安心して受け入れられ

ません。

この男性は罪に問われるべきである。

・60歳の女性

精神病患者であろうと老婦人であろうと健康な若い女性であろうと恥ずかしい思いをさせてしまったこの男性医師は、その事に関して恥ずかしい気持ちはないのであるでしょうか？人間の尊厳の一つの現れです。暴力で無理やり恥ずかしい思いをさせられるなど、許されない事でもあり、病院を辞めて自分を見つめ直して欲しいです。

・60代の女性

人間としての扱い方が出来てない。本来は看護師の考え方を考え直して欲しいです。それでないと、不安で入院も出来ません。また、この男性を辞めて罪を償うべきである。

・68歳の女性

許されないけれども看護師の人の気持ちも分かる。自分も分かるけれども、やってはいけない事だと思います。自分を見つめ直して欲しいです。また、この様な恥ずかしい思いをさせてしまった事に対して謝罪して欲しいです。

・40代の女性

許される行為ではないですが、その男性看護師のやった事は同じ女性としてありえません。

・60代の男性

行為が必要であったのかわからないが、表現だけの内容かはわからないが、許せない行為だと思います。その患者さんを傷つけてしまった事に対して、罰を受けるべきだと思います。

・50代の男性

人権無視であり、絶対に許されるべきではない。その男性看護師は病院を辞め、罰を受けるべきであり、自分の心をもう一つ見つめ直し、新たに新しい病院で働いて欲しいです。

*和美ちゃん（女性、または彼女のキャラクター）ならではのアンケート集計力です。男性陣には太刀打ちが出来ません！！

*和美ちゃんからの1ポイント……。犬などを連れていて、明らかに「散歩」をしていて時間が余っている様子がうかがわれる人にターゲットを絞った。恋人、子供連れはNGだそうです。

・70代の女性

プロの資格を持っている人が本来気をつけるべき事の正反対の事をするのは許されない。

・70代の男性

こらは、全くの犯罪です。当然、有罪であるべきです。

・30代の女性

人間としての価値（プライド）を傷つけるものでしかありません。家族が同じ事をされていたらと考えたら、悲しくて仕方ありません。

・30代の女性

病状を悪化させるだけです。



森島先生の話をもみんなで聞く(5月8日広島)

5月8日広島にて、広島修道大学人文学部の森島教授、広島大学の女子大生1名(共に「健常者」)、「ほっとスペースス八王子」側からは間宮、矢崎、塩原3名と合計5名で問題となっている『橋本容子裁判』について、お話を賜りました。橋本さん自身が自ら率先

5・8広島行動の報告

共同代表・塩原 哲夫

してこの裁判を始めたと聞かされて驚きました。橋本さんは、法曹関係も学んだのでしよう。裁判官とも対等に口を利くといった内容でした。

実行力がある人で、弁護士のカも借りずに独自に彼女の主張を堂々としている。
女性としての「辱しめ」の様な現実を大胆に告訴が出来る勇氣のある行動に思わず感動をした次第です。おまけに、もし訴訟を起せば、彼女を診察してくれる精神病院が無くなってしまう可能性もあるので、とても勇氣のある行動だと思ふ。
男性の私でも、とても真似の出来ない事だ。この様な訴訟が全国的に知られば、我々の様な病者の置かれている立場が「医師の上から目

自己紹介 (新入会員)

ほっとスペースのボブ・ディラン

4月に入会したほっとスペースのボブ・ディランと申します。趣味は音楽を聴いたり、映画を見たり体を動かしたりすることです。音楽はフォークやロックが特に好きで、ギターを弾いたりもします。映画は二週間に1回のペースで見たりしています。スポーツは毎日近所を歩いたり、たまには高尾山に登ったりします。高尾山はミシュランガイドに載ったこともあり、外国人のお客さんが増加したような気がします。こんな私ですが、皆様と仲良くやりたいと思いますのでよろしく願いいたします。

自己紹介 (新入会員)

てるゆき

初めまして。「てるゆき」と申します。51歳、男。いくなればオッサンです。私が発病したのは十数年前。うつ病、パニック障害、強迫性障害、処方薬依存、アルコール依存、他と病気のオンパレードです。そして、これらの病気と闘っている間に家族、家、仕事、財産等すべて失いました。気が付いたらポロアパートで一人暮らしです。とにかくまず食べていくことを考えねばならないので、就活をしましたが、年齢と精神障害というハンディキャップで、50社以上応募したにもかかわらず、すべて書類選考で落とされ、やむを得ず生活保護にすぎりました。とにかく食うことの問題は何とかなりましたが、「孤独」という重い2字がのしかかってきました。社会からドロップアウトした惨めさと寂しさにおそわれ、病気がどんどん悪化していきました。

そんな中で見つけたのが『ほっと』でした。実際に来ると、私と同じような状態にある方やとても親切な方が多く、私の苦しさをわかっただけ、とても居心地が良かったため、すぐに入会の手続きをしました。まだ、入会しばかりですが、今は孤独感も少しづつ薄れていき、活動を通じて自分もまだ社会に繋がっているということを感じるようになりました。やはり人間は一人では生きていけません。早く多くの仲間を作り『ほっと』の一人前の会員になりたいと思います。

こういった事は、「健常者」でも、とても真似の出来ない事だと思えます。橋本さんは

この様な訴訟が全国的に知られば、我々の様な病者の置かれている立場が「医師の上から目

線から、本来対等であるべき同等の目線」になる事が期待出来る。今回の訴訟が勝訴する事を

切に願う次第だ。
二〇一〇年五月二二日

科学技術館、北の丸公園ツアーに参加して

ツチノコ

2月10日に北の丸公園、科学技術館ツアーに参加してきました。京王八王子で古川さん、ディ

キシーさん、黒川さん、高木さん、堀部さんと僕で待ち合わせをして総勢6名の陣容でした。新宿から九段下に乗り継ぎ日本武道館を横目に科学技術館へ到着。

皆でお昼をとり1時から4時まで観覧しました。

まず、向かったのが科学実験を公演実習で行うワークショップです。



超低温、空気砲など面白い実験が盛りだくさん

実習と
言っても
そんなお
堅いもの
ではなく
シヨミ
たいなも
のです。
白衣姿
のお姉さ
んが帯電
について
模範実習

を行ってくれます。

風船を毛布でゴシゴシ擦ると電気が起こり帯電し何にでもくっつくようになります。本当になんにでもくっつくのでみなで大笑いしました。又、カーボンで出来た棒を擦ると逆の極性に帯電します。

その棒でマイナスに帯電した風船を追うといつまでも浮いているので子供たちが魔法みたいだと大喜びしていました。

同じように帯電している特殊なシャボン玉も浮遊し科学実験というよりは前衛芸術の様でした。

最後に観覧者全員で手をつなぎ輪っかになります。そこにアルミホイルを巻いたピーカーにたくさん電気を貯めます。これを流すと、全員に一瞬、電気ショックが走り皆驚きました。子供は喜んでいましたが、僕は本当にビックリしました。その後、全館を一階ずつすべて見て回りました。

4階の鉄の丸公園とか、3階のジオラマだとか2階のモーターランドとか、ふざけた建物だな。と正直思いましたが、まあ、一種のテーマパークだと思えばそれ程腹も立ちません。

民主党の事業仕分けで科学事業の大幅削減が行われそう、元宇宙飛行士の毛利衛さんが徹底抗戦しているようです。まあ、僕も自称活動家なので毛利さんを応援します。

その後、ワークショップで再び超電導の実験を見学しました。液体窒素はマイナス196度だそう空気に触れると一瞬で沸騰し蒸発してしまいます。

生花(バラ)を容器にいれると瞬時に凍りつき手でバリバリ握りつぶせてバラバラになりました。電極は超低温化では異常な動きをし、セラミックの磁石を冷やしても一つの磁石と近づけると、ある一定の距離を保ちながら空中に浮き続けます。

又、小さなスポンジの破片を冷やしてプラスチックの容器に入れ蓋をすると空気が膨張してポンと音がして蓋が飛びます。

ポンとして蓋が飛び白衣の綺麗(?)なお姉さんがキャッチするとヤンヤんやんと子供たちが拍手喝さいです。

こうして技術館を堪能して竹橋駅から江戸城を後にしました。

その後、皆と別れ堀部氏と都庁の食堂においてサシで飲みました。

拘置所の浴場で右翼とモップを振るって乱闘したとか中々おもしろい話が聞けました。

堀部氏お得意の革命談義を傾聴しながらおいしいお酒になりました。

そんな感じで町田に帰ったのがもう九時すぎだったかな。

僕はこつ見えても中学生の時から科学者志望でした。大学は化学科でバイオテクノロジーの勉強をしていました。今じゃ元素周期表すら思い出せませんけど(笑)。H, He, Na, Be…だったかな?(冷汗だく)

夕食会

つづつ桃

思えば約11〜12年前の頃。私は、ほとんど毎日、夕方5時に勤めを終えた後、その足で「ほっと」へ直行。インターネットで知ったばかりの「ほっと」をたずねたばかりの頃だった。独身で恩方のアパートに住んでいたため、ここで安価でみんなで食へられるのを聞いて喜んで夕食会に参加した。当時は約15〜20人の参加。メンバーの顔ぶれはよく覚えていないが、みんなに

温かく迎えられたことは覚えている。(当時から「さくら桃」「桃さん」と呼ばれていた)家庭的な雰囲気、家庭的料理の味には、独身のさみしさを忘れるひと時だった。

2年ほど参加していたが、それから転勤や結婚、県外転居で「ほっと」から足が遠のいた。しかし、「縁」というのは強い。2008年春。元夫の暴力、そして育児困難などによるストレスから病が悪くなり、離婚して帰京した。「どこか私を受け入れられる場所はないか」と求め、再び「ほっと」の門をくぐった。そして再び夕食会に出逢う。今度は、講師の村里先生が入り、本格的な調理が始まっていた。今まで7年近く結婚していても料理にはまったく自信がなかった私が、村里先生の懇切丁寧な指導、みんなの教えあいなどで、参加することに料理する事が楽しくなった。腕に自信がつくようになり、再び独身生活を送るようになった時、そして約

1年半後に再婚した後も、夕食会で習った調理法を生かして自炊することができた。とても有意義で大変ありがたい。「ほっと」のなかで、一番思い入れのあるプログラムである。今は、私は復職訓練のため、施設通いで忙しいが、やはり夕食会があると、生活のリフレッシュのために参加している。なんとしても、村里先生の明るい笑顔と楽しいお話が楽しみになってい

る。そういえば、近頃「ほっと」メンバーの夕食会の参加メンバー・協力者が減っているのではないだろうか? 村里先生や職員が孤軍奮闘しているシーンが増えている今日この頃。もっとみんなでワイワイ料理すれば楽しいはずなのに…と心の中でボヤいてしまう私である。

おまけですが、村里先生がいらっしやらない時に、私が下記のレシピを考えて夕食会を開催しました。(参考までに)。

まずは、ハンバーグ用の玉ねぎを刻んだり、付け合わせの野菜、スープの野菜を切りました。で、切った野菜をソーセージと煮込み、付け合わせのニンジンバターで甘く煮たり(グラッセ)、ハウレンソウをソテーしたりしてました。コンロが空いた所で、メーカーンを揚げたり(フライドポテトは初なので緊張した)、こねて成型したハンバーグを焼きました。生焼けがでるかも? と自分で不安になりましたが、みんなで食べてみたところ、「おいしく焼けている」と評判でした。やっぱりホームメイドなハンバーグは、玉ねぎと肉汁がシューシーでおいしいです☆

〜チキンカレーとサラダ〜
アスパラとゆでたまごをゆでる。

サラダづくり。
たまねぎ、とりにく、にんじん、じゃがいもの順に炒めます。

10人前の材料を炒めるのは力が要しました。思わず…男手が欲しい…。(〆)

〜ハンバーグステーキ〜
レシピは…。今回は10人前。
牛豚あいびき肉 1kg
玉ねぎ 3個
パン粉 2カップ
卵 2個
牛乳 大さじ3杯
ケチャップ・中農ソース

〈つけあわせ〉
にんじん 2本
ハウレンソウ 2束
じゃがいも(メークイン) 小5個
バター

それにキャベツのスープを。
キャベツ 半分とちょっと
ニンジン 1本
たまねぎ 1個
だいこん 1/4本(のこりもの)
荒挽きソーセージ 2袋
コンソメ・塩・コショウ



入院形式の精神病院を廃止し地域に戻すバザリア法で繰り広げられるコメディタッチの物語

もしくは殆んど無いそうです。大戦後、伊は今の日本の様に「精神障害者」隔離政策を採用していません。その政策転換を計った法律が「バザ

リア法」です。「精神障害者」を地域に戻して精神病院を無くしてしまおうとの試みです。僕はつぎのドキュメンタリー映画だと思っていたので、ハリウッド映画並みに緩急のついた面白い内容は意外でした。もちろん当事者は登場せず、「健常者」の役者さんによる映画です。あらすじは、失職中の労働組合の委員長が精神病院の中で協同組合を立ち上げます。協同組合員は当事者なわけです。最初は仕事の作法すら知らない当事者が仕事に熱中する中で自信を取り戻していきます。そして服薬の量が段々減っていきます。只、長年入院していたせいで社会の中で様々なハプニングを起こします。会場内は爆笑で、僕も大笑いしましたが、患者の性欲の問題の処理だとか結婚願望の問題などは全く笑えませんでした。むしろ顔が引きつってしまいました。

この映画は実話を基にした娯楽映画なわけですが、当然、映画だけでイタリアの精神医療の現状の把握は難しいです。しかし実際のところイタリアの全人口が仮に7000万人だとしても当事者の組合員数3万人というのはいくらなんでも少なすぎる様な気がします。又、精神病院が全て閉鎖状態で、実際どのように当事者が地域に根付いているのか?という事も興味があります。全体的な僕の感想として、あらゆる意味で勉強になった映画でした。翻って日本の精神医療、政府の精神医療施策を顧みるに精神病に対する認識の閉鎖性の問題にいよいよ突き当たります。日本は人口あたりの精神病院数、入院患者数が先進国中、突出して高いです。そのあまりに異常な数字にWHO(世界保健機構)から厚労省は度々警告を受けています。その為、厚労省は少々重い腰を上げ、社会的

イタリア映画「やればできるぞ」を鑑賞して

ツチノコ

材料を炒めて、スープの入ったなべに移して、約15分煮ます。今回はチキンとにんじんの火の通りが良かったので、こんな短時間で済みました。カレーが出来ました。でも、物足りない。

むらさと先生がいらっしゃるときはもっと疑っているし、小さなおかずもついている。それでも、おいしく仕上がったカレーでした。みんな、一丸となって料理してくれて、ありがとうございます。

当初はうまく行っていた事業も協同組合長のミスで当事者の中から犠牲者が出たことにより、つまずき始めます。又、当事者自身も他の当事者を顧みない独善に陥り、結局事業は失敗に終わってしまいます。皆が打ちひしがれている中、当初から協同組合活動に否定的であった精神科医が、患者の病に対して有効なものがあったと確認し今後も活動を継続して欲しいと組合長に嘆願して映画は終幕となります。最後に現在イタリア全土で協同組合は2500、協同組合委員数は3万人だとテロップが流れました。

入院を減らす。当事者を地域に戻し自立させると言っています。しかし厚労省の言う事を現実的に実現するにはかなりのハードルがあります。地域の受け入れ態勢、自立できるだけの経済的問題(雇用の問題)、医療的支援などの諸問題です。

KY(空気が読めない)

誰かが何かを主張している時に「空気が読めない。」と言っている人たちがいる。無礼だと思つ。人の意見は謙虚に聞いて、誠意を以って持論を返さなければならぬ。

人が主張しているのをいちいちKY、KYと言って黙らせ自分は好きかってにしゃべったら言論弾圧だとわかるだろう。国家権力が人民に「これはKY、それもKY。(これはしゃべるな、それもしゃべるな。)」といったら大変なことになる。三〜四年前、多摩総に入院していた。そこに僕が政治的意見を言つと「生意気だ。自分の頭の蠅を追え。」という態度で茶化して言い負かす職員がいた。他の入所患者にもそうしていたと思つ。ある時期僕はその職員に「政治的な意見を言つと『空気が読めない。』という人がいる。『それは言論弾圧だね』と言つたらその職員はやはり茶化した。

僕は「それが空気が読めないという言論弾圧でしょ。」と言つたら彼は返す言葉がなかつた。

僕が思うに当事者の自立を阻む一番の要因はやはり経済です。お金です。殆どどの障害者はお金の問題でひどく苦しんでいます。お金をださずに理念だけ押し付ける厚労省のいい加減ぶりには本当に呆れます。一昔前に流行語になりましたが「同情するより金をくれ」です。

は言論弾圧だ

シベリヤ健次

た。僕は彼を言い負かさうとしたわけではない。彼と対話しなかったのだ。天気や季節のことだけだったら建設的な内容にならない。政治的談議が一番内容のある対話になると思つ。

今日の精神医療について

今津陽一郎

今の精神医療について「医療」に値しない劣悪を作った「医者」の責任について多くの「精神科医」は全く考えていません。扱いにくい病者を保安処分の対象として、また、「社会復帰」したい、「病者」をゆるやかに管理するという姿勢は厚生労働省の考えは法務省の時代から変わっていません。多くの「精神科医」は今の「医療」が差別的で処遇困難者や触法精神病者を

君が代不起立と資本主義

網走健次

嵐にムーアの映画「キャピタリズム」を見て、夜に2・6総決起集会に参加した。「キャピタリズム」では資本主義の非人間的な面がよく表現されていたと思つ。

2・6総決起集会には良心的で気骨のある教師が沢山壇上に立った。

正直言つと「キャピタリズム」を見る直前まで君が代不起立に不快感を持っていた。しかし、ムーアがツマス。メディアが資本主義を支えていると主張していたので僕は「自分がマス・メディアに刷り込まれていた」と気がついて、君が代不起立に納得した。更に勉強しないと。

作つたことの責任について考えてなくて、もと犯罪要因や危険性を見て精神科救急、電気ショック、移送制度などを行つて、ある意味で厚生労働省レベルに乗つたてなんの問題意識を持っていない無能な精神科医が多すぎる。そして、「治療積極主義」として「病者」の生活や思想まで収入して「狂う権利」まで奪つて今の「精神医療」は「良心的精神科医」も含めて

「強制治療」であって「病者」の本来の求めている「治療」ではありません。法律的にも「強制入院」や「生きる権利」まで奪って生活する上で「キーンサン」が不備な点が多くあります。僕らクリニックに通って精神病者でも触法精神病者を死刑にせよとか「病状の悪い」病者をキチガイといっている痛みのない「精神病者」は内なる差別を持っていることがわかるし、「精神病院」の痛みのある病者は*(判読不明)さしくとか本音を言っている怒りをかかっています。僕は「キチガイ」と言われていますが、全くこたえていません。「患者会」についても、「病状の悪い」病者」を支えることが基本姿勢である。「軽い」病者」は「今の精神医療」について何の問題意識も持っていないく、「社会復帰」を持っても今の社

保安処分について

今の精神医療について「統合失調症」と言っ
てよくなっていると思っている「病者」はいる
が、現実として「救急」「電気ショック」と言っ
て「医療中断者」とか「処遇困難者」を対象と
して保安処分のルールをつくっている。

そのことについて、多くの医者は治療に値しな
いとして「治療」のギブアップをして、自らの
治療が貧困で治療対象として管理している差別
意識について考えてなく、金もつけばしっかり考
えて「管理しやすい病者」を回転して病院がも
つけるシステムで、退院しても生活の保障もし

会の精神構造に乗っかってつぶれて「精神病院」
の入院の繰りかえしか、自殺するのが「社会
復帰」の現実です。福祉関係者や「医療従事者」
は社会復帰をあおって病者をつぶして自分の差
別意識が見えなく「病者」の怒っている無神経
なことを言っている、僕の「医療」の差別性につ
いてわかっていなく全く無能です。東京あたりで
は「精神科救急」「電気ショック」が広がって
共闘の医者たち、「電気ショック」や「救急」
を行ってかかってのスローガンと別にもともと変
質して「治療権力」について見えていません。
僕は「キーンサン」で、自分はおとなしい位置
付けしていません。また病者でも内なる保安
処分あって、綺麗事は言えないのが病者の現実
です。

て、施設で管理して病者をつぶしているのが現
実です。

ある意味で医者ばかりでなく、福祉関係者
など文章で理論的に軽く書いても、「病」者が
生きている現実はきびしく、孤独で自殺したり、
「触法病者」を生んだらして、このことにつ
いてわかっていない。「社会復帰施設」について
「病院」の中にあって「病状」が悪くなったら
入院して悪くなる「施設」にもどって「病院」
がもつけることと治療対策である。

「精神保健福祉法」でも「移送」制度が認め

Q

られ応急指定病院に強制入院され、強制治療な
ど劣悪なことをさせられ、出てこられないとい
うシステムになって、このことになんにも考え
てない「医者」が多くて学会の医者達の症例研
究をして、民間病院でソフトな救急と国公立病
院はハードな「救急」として電気ショックに流
れている。

かつて保安処分反対とか精神病院解体と言っ
て、できもしない大きいことを言っている、左翼的
な空言をかかかって内容もなく医療権力につ
いて批判的に対象化せず、転向すべくして転向し
て「電気ショック」や生物学派、精神病院の院
長になって、ある意味では確信犯である。

また「病者」について暴行マニュアルもつ
くって、今の「医療」は「処遇困難者専門病棟」
から保安処分のルールをつくられている。昔
から厚生省は救急を推進して、そのルールに
のってさかんに救急といつて「危険な病者」の
「犯罪素因」という差別的側面をいって、電気
ショックに流れて「病者」を殺していることに
無神経な医者が多くいて、「病」者を生活をす
るなかで、しんどい思いをして、このような「
良心的精神科医」を糾弾するのはあたりまえな
のに、「医者」の改革運動に敵対したと平気で
言っている。

実際「処遇困難専門病棟」や「救急」、電気
ショック、「移送制度」について、どれだけの
「医者」は反対したか疑問で、「医療観察法案」
にだけ反対で「良心的精神科医」の差別性は
けっこうあります。

「ほくらは生活を通して「救急」「電気ショック」について保安処分として反対していきま

「投稿」

「普天間基地を自衛隊下総基地に移設しよう」

鈴木俊彦(賛助会員)

過日千葉に住む友人・知人に表記の「提案」をした。賛同者はわずかで、その一人が下総基地周辺に居住する相川晴彦氏であった。彼は「原則的に賛成だが、地元では総スカンだろうね」と言っていた。ちなみに普天間の人たちも現在の基地に総スカンである。

郷里の岐阜で友人に自衛隊の岐阜基地への移設を提案してみた。静岡の遠州の友人を訪ねた時、静岡空港への移設を提案してみた。いずれも「嫌だ」という返事だった。それなら普天間の「嫌だ」はどうなる、と問いかけた。その時はじめて友人たちの意識が普天間のそれとシンクロした。

岩国の場合も「厚木が来る」となって反米軍基地闘争が盛り上がった。それ以前に「厚木基地反対」の闘いがあったとは聞かない。

これらを想像力の貧困だと批判することはできない。人は本来楽観的にできているものだと思う。我身をつねらねば他人の痛さが分からない

す。

いのが常だと思う。

私たちは72年の「沖縄返還」という沖縄再領有化以来、37年間にわたり沖縄に米軍基地を押し付けてきた。この「新国土」は日本の総面積の0.6%でしかない。ここに米軍基地の総面積の75%を集中させている。

「沖縄返還」以前の基地は、それを提案した裕仁天皇の責任であり、基地を建設した米軍の責任であろう。しかし「返還後」の責任はいつに我々にある。具体的にいえば安保条約を締結した政権を選んだ我々であり、安保闘争に敗北した我々である。沖縄の人々は安保に何の責任もない。彼らは安保を闘うことすらできなかった。

多田健夫氏を追悼する

「ほっとスペース八王子」第2代代表の多田道夫氏の弟の多田健夫氏が孤独死したことを伝え聞きました。

多田健夫氏は僕の住んでいる西東京市の隣の

安保には何の責任もない沖縄からはすべての米軍基地を本土に移設するのが本当だろうが、米軍基地の0.6%くらいは我慢してもらえないかもしれない。残る99.4%は本土で引き受けようではないか。そうしてこそ国民すべてが平等に「安保」と正対することになる。普天間の我々の周辺への移設は、その第一歩である。10・8のデモで、私はゼッケンに「普天間の基地と闘いを首都圏に移設しよう」と書いた。

米軍基地そのものを撤廃すべきだ、と言って県外移設に反対する人がいる。それなら全面撤廃の具体策を提示してほしいものだ。私は沖縄を基地と反基地闘争から解放することが先決だと思う。本土の沖縄化である。普天間の県外移設を言う首相が誕生した今はそのチャンスだ。逆にいえば、現在の我々には普天間の県外移設しかチャンスがないのである。

移設先は政府が決めればよい、という説もある。しかしそれは単なる「基地の移設」に終わってしまう。大切なことは、市民自らが米軍基地を受け入れ、沖縄の人々を解放し、その闘いを引き継ぐことにある、と私は考える。

堀部 正

練馬にアパートを借りて住んでいたため、彼の原稿の件で僕の自宅に来られたこともありました。

多田健夫氏は高校時代にたまたま良い教師に

巡り合い、数学に対する興味を人一倍持てるようになったそうです。それだけでなく、数学の数式を展開することで自分の思いを表現する表現行為として数学を自分のものにしていました。

音楽を奏でたり、絵を描いたり、書をするのと同じように、昨年杉並のグループホームであり得ない孤独死をした和田重徳さんがマジックで自分を表現するように多田健夫氏は数式で自分を表現していたのです。

厳密で緻密な論理をを巡らせて数式論理の美しさを通して、自分を表現していたのです。

同じ事柄を数式で展開するにしてもその時々々の気分や数式展開についての議論を大にすることで更に緻密さを極めたり、様々なアイデアが生じて数式展開に彩りを添えます。

彼が「ほっと」ニュース上で展開した数式は複素数空間における直線と実数空間における点楕円の関係でした。僕も興味深く読ませていただき、多田健夫氏と相当議論もしました。次号では彼の展開した数式を転載する予定です。

「ほっとスペースス八王子」の一部の仲間からはなかなか彼のその気持ち理解されず、彼を誤解する仲間へ何度も「ほっとスペースス八王子」で傷つきながら、「ほっとスペースス八王子」に通っていました。

ひどいのは「自己満足の為に数学をやっている」などと中傷された時、彼は言います。「絵を描くのが好きな人に『お前の絵は自己満足の絵だ』と言われるのと同じだ、と説明していま

した。

自分を認めてくれない、自分を受け入れてくれない辛さは誰でも同じなんです。

彼は結局、「ほっとスペースス八王子」の仲間からは理解されずに、練馬のアパートに一人暮らしをしていたそうです。そして、孤独死です。こういう仲間を僕たちは増やしてはいけません。

「ほっとスペースス八王子」がもっともっといんな仲間を受け入れられるようになって欲しい。

差別者たちの腐敗した運営から解放された「ほっとスペースス八王子」

堀部 正

「ほっとスペースス八王子」での二〇〇九年の一年は何度も言うようですが、本当に大変な一年でした。

僕が再発したのを皮切りに今までの僕の人生では体験したことがない本当にしんどい年でもありました。

僕が信頼していた仲間と思っていた植松氏という人物から僕が排除されるとは考えてもみないことでした。何でもこういう目に遭わなければならぬのだろうかと思いはりませんでした。結局はある差別的な職員の差別・分断的な考え方が植松氏の差別性に影響し、僕を排除に向かわせたのだらうと思います。

差別され、迫害を受けている「精神病患者」の

いと思います。

多田健夫氏が「ほっとスペースス八王子」のニュースに連載で原稿を書いてくれたものを遺稿として転載させていただきます。

題して「点楕円の傾きと複素直線の傾きの関係について」です。

僕も多田健夫氏の原稿について議論させていただいたおかげで彼のこの原稿の意味がやっとのことで理解できるようになり、面白く読ませていただいた記憶があります。

中に対立と分断を作り出す最悪の問題が「陰口」「悪口」です。「精神病患者」解放運動の中でこの問題が長年にわたって害悪として教訓化されてきました。が、解放運動の経験が無い仲間にとつて「陰口」「悪口」は社会経験が少なく、生活空間が狭い僕ら「精神病患者」には避けられない宿命のようなものです。住んでいる生活空間があまりに狭いために多かれ少なかれ「陰口」「悪口」がつきものようになっていきます。

しかし、この「陰口」「悪口」を組織して「精神病患者」の中に分断や対立を作り出し、仲間を排除することは許しませんが、仲間を

団結するべき同じ心の病の仲間が同じ心の病で苦しんでいる仲間を排除するといふあるまじ

きことが「健常者」によって組織されたことは本場に悲しいことでした。こんな差別的なことが「ほっとスペース八王子」内で起きたことは悲劇です。一体何のためにこれまでの活動があったのでしょうか。

一部の「健常者」職員の利益のために「ほっとスペース八王子」内で「いじめ」や排除がまかり通る状況は極悪の空間を生み出しています。「ほっとスペース八王子」内の大きな声の人の顔色を見ながら生活するという信じられない、そして「ほっと」出来ない空間となり果てていました。

代表自らが自分が気に入らない会員を怒鳴り散らし、怖くて近寄れない状況さえ生み出していました。いまは代表自身も反省しているだろうと思います。彼も差別者たちによる犠牲者の一人だったのです。

本年度総会では差別者たちによって変質させられた「ほっとスペース八王子」を当事者で運営するものに変革する方針が確立しました。差別と闘う新執行部の誕生です。

黒川裕之、塩原哲夫両共同代表に率いられた

「一」心に響いたもの

「ほっとスペース八王子ニュース」130号は、とても充実した内容でした！

ほっやニュース1310号で考えたことや

運営委員 間宮 久子(「精神病患者」)

会員の皆さんが書かれた多くの文の中で、私の心に響いたのは、

- (1) 井田さんの、「Mさんの逮捕に思うこと」
- (2) コンスケさんの、「ワダックさんの死に

新執行部は「おれたちは調教される存在ではない」と当事者による運営を掲げて成立しました。

差別者たちを「ほっとスペース八王子」の総意で駆逐し、本場に当事者による自主運営となるべく新体制が築かれ始めました。まだまだヨチヨチ歩きの新生「ほっとスペース八王子」ですが、よろしくお願ひします。

僕も「障害者自立支援法」制定の動きで焦ってしまっただけに運営することがありました。その強引さに反発されて一部の職員や、会員がやめていくこともありました。

それが差別者たちの思う壺となり、それを口実に差別者たちに都合の良い「健常者」や行政に従順で反抗的な態度を示さない「精神病患者」だけを選別した。腐敗した運営のあり方へと導いてしまったのだと反省しています。

橋本容子さんの人権侵害訴訟を切り口として長期強制入院を強いられている大根田恭一さんを救済する活動を通して、「ほっとスペース八王子」の設立当初の理念を実現すべく頑張ってきたと思います。

堀部

ついて」

(3) 村仲さんの、獄中記「初めての逮捕」でした。

(2) は、本当に胸を打たれました。ワダックさんの、「孤独死?」の真相を究明し、「2週間の放置」の責任を追及して、責任者の謝罪をかちとり、それを、ワダックさんへのせめてもの饞(はなむけ)として、ワダックさんの無念をしっかりと心に刻みましよう。

また、(1)と(3)についてですが、去年9月18日に村仲さんが逮捕されたことを「ほっとスペース八王子」の皆さんが、「何とか助け出したい!!!」「村仲さんは留置所の中で本当に心細い思いをしているに違いない!!!」と、心を、思いを一つにして、面会できない土曜日、日曜日と固唾(かたづ)をのんでいる様子がまるで私の目のまえで、映像を見ているように、伝わってきたからです。

私は「これだ!!!」、これこそが「ほっとスペース八王子」の姿だ!

「精神病患者」の解放闘争の姿であり、根本精神であると思いました。

(1)で、井田さんは、村仲さんの逮捕、そして、すぐに「ほっとスペース八王子」に連絡をすることができなかったのは「何を話しても大丈夫という信頼関係が無かった」からと結論つけています。

(1)で、井田さんは、「何故、信頼関係が無かったのか」という問題にぶつかったははすですが、「・・・信頼関係が無かった」と、文章は止まっ

ています。

何故でしょうか? 「ほっとスペース八王子」の存在意義に直結する重要問題だからだと思えます。

私たちは、さらにこの先まで進みましょう。ここからいくつかの分かれ道があります。

① 明解な答えが見つからないけれども、とにかく力を合わせて、捕らわれている仲間を奪い返そう! 助けだそう! と、闘いながら答えを探していく。

② 「自分が捕まってないからいいや!」と考え、見て見ぬふりをする。

③ あまり難しいので、関係のないことを言っ的外れの方向に考えを向ける。

となります。ここで問題になるのは、「仲間を助け出そう!」という、肝っ玉がどこまで太いものになっているのかということ、闘い気合いのあるなし、腹の据わり方です。

私は、「精神障害者」の自立的・自主的運動としての「ほっとスペース八王子」が取るべき正しい道は、①あるのみだと思えます。

当時の「ほっとスペース八王子」が、①を全力でやろうとしていなかったから、村仲さんも、「ほっとスペース八王子」を信じ切れず、逮捕・拘留されても、SOSを発信できなかったのではないのでしょうか?

「仲間を見捨てない!」「仲間を助け出す!」「これを中心に据えて、行動し、闘っていかねば、

おのずと信頼関係が成立していくと思えます。

それを元にして、「精神障害者」差別と闘う力もどんどん強化されていきます。

それがあれば村仲さんのように留置所に微罪で、22日間も閉じ込められたり、大根田さんのように、何もしていないのに、精神病院に、3年以上も閉じ込められたりすることは無いと思えます。これが無いと、村仲さんや大根田さんのようなことは、とんだん起こります。

また、信頼関係が未だ不十分だから、村仲さんは、救出された今でも、まだこの問題で悩んでいると思えます。

(3)の、村仲さんの、「獄中記」初めての逮捕」を読めば、警察は、「精神病者」を弾圧するばかりで、「ほっとスペース八王子」こそが頼りになるものであることがとてもよく判ります。

「誰を頼ればいいのか?」「みんなに、迷惑をかけているのではないか?」「弁護士はお金がかかるから頼めない?」心の中は、申し訳ない気持ちと、不安で一杯になると思えます。

さくら桃さんが「『精神障害者』だから取り調べを強化して余計疑う事はなかったでしょうか?・・・私もゾットします」と書いていますが、本当にそう思っています。

「精神障害者」は、いつも治安の対象として扱われています。この様な差別的攻撃が、一体いつ私たちに降りかかるか判りません。また、いつでも、降りかかります。

「II」私の提案

① 「ほっとスペース八王子」と「多摩一般労組ほっとスペース八王子支部」と「賛助会」とが力を合わせて、「救済対策部」をつくってはどうでしょうか?

：「賛助会」の中には、お二人の弁護士が入っていると思えます。

② 弁護士の方から、「もし逮捕されたら、どうしたら良いのか?」というような前もっての予備知識を、知っておいたら心強いのではないのでしょうか?

また逮捕・拘留や病院閉じ込めの理不尽にさらされていない人にとっては、「転ばぬ先の杖」でも言いましようか。これはあくまでも、(1)で述べた事を前提にすることです。

③ 「ほっとスペース八王子」の電話番号、弁護士の電話番号を書いたものを、財布とかに入れておいて、万が一に備えます。

そうすれば、不安になっても、「ここに連絡して!」といえればいいのですから。言えなくても見せるだけで良いと思えます。

「III」これか、とつぶさるべきか?

「ほっとスペース八王子」内の事は、所長、共同代表を先頭に職員、会員、打って一丸となって仲間を守ろう! 閉じ込められた、全ての仲間を救い出そう!...! 奪い返そう!...!



富山から引越す前の間宮さんとスカイプでの会議

①今、問われているのは、「信頼関係の確立」です。その真反対にあるのが何もしないで、自分の生活や、精神状況さえ安定していればそれで良いと考え、悩んだり、差別されて暴れる奴は、自業自得だ、110番だーと、考えてしまっ

ては差別と闘えませんか。
 『ほっとスペース八王子』内で傷害事件が起こったら110番に電話をする』という考えが、大手を振ってまかり通ってしまうとすれば、そんな「ほっとスペース八王子」を、誰が仲間として信頼できるでしょうか。そういう考えは「ほっとスペース八王子」の設立理念に反するものです。

「ほっとスペース八王子」の職員は誰であれ、金稼ぎを目的に来ているのではないでしょう……！

若かろうが、年配だろろうが、先頭に立つ人が、差別と闘う気合いや解放理念のない人では、「ほっとスペース八王子」の闘いや会員の権利を守っていくどころか、逆に、何より大事な、

熱い絆を切り刻んでいくだけなんです。そうなっていけば、村仲さんの、イライラの原因である、「ほっとスペース八王子」消滅の危機がいよいよ本当になってしまいます。

理念の問題を抜きにして、形式だけにとらわれた「世代交代」で、どうして、

「ほっとスペース八王子」消滅の危機と闘うことができるでしょう！

今なお、「ほっとスペース八王子」で根強く続いている、「世代交代論」は、空論に基づく全くの誤解なのではないかと思えます。

②大根田恭一さんは、昨年暮れに、3年ぶりで「外出」でき、「ほっとスペース八王子」の望年会に出席し、みんなと交流し、つかの間の自由を味わいました。しかし、悔しいことに、その後は、いまだに病院に閉じ込められてしまったままです。そして五ヶ月が過ぎて、未だに監禁されています。このままでは、「ほっとスペース八王子」は、仲間を奪われ、監禁されても何も手出しができない、なさけないものになってしまいます。

このままではかつて「ほっとスペース八王子」を作った、熱い絆は切り裂かれ、「ほっとスペース八王子」は生きながら腐って、二〇一一年3月を待つまでもなく死んでいくしかありません。

1日でも早く、彼を取り戻す事こそ、「ほっとスペース八王子」消滅の危機と闘うための、最初の関門では無いでしょうか。

大根田さんと取り戻そう！そして、大根田さん、村仲さんらとともに、打って一丸となって、全ての差別を許さない闘いで、「ほっとスペース八王子」消滅の危機に立ち向かって行きますよ！